

人生と驚き

人生は驚きであるといわれている。驚きは感動を呼び、感激を招くものである。もちろん、幼いときは、見るもの聞くものすべてが驚きであるが、ある年齢になると驚きも感動も鈍化し勝ちになるものである。新鮮な感動や感激がなければ、生きがいというものはそもそも考えられない。われわれは、何歳になっても新しい発見や経験に、驚きを感じるみずみずしい状態を常に保っていたいものである。

驚きを感じるには、その根底に、物事に対する興味、少なくとも関心がなければならぬ。猫に小判、豚に真珠ということでは、もともと驚きの入る余地がない。人生にとって大切なことは、何があったかではなく、何を感じたかということであろう。

先般、私は衆議院在職二十五周年の故を以て表彰を受けた。その機会に私は、わが国の国勢の歩みを回顧してみようということになり、諸々の指標を中心に調べてみた。この四分の一世紀の間に、テレビが出現したことをはじめとして、乗用自動車の保有率が二百三十四倍になり、国民一人当りの貯蓄高が六十数倍にもなっていることなどに驚いたものである。また、高校進学率が

約二倍に、大学進学率が約四倍に高まっていることも発見した。こうなると高校の進学率はもう九割を超えているだろうし、大学進学率は四割にも達しているはずである。

この進学率の向上自体は、もちろん結構なことにはちがいない。ただ、ここで一つ心配になることがある。学歴が上がっていくということは、専門化が進むことを意味する。小学校や中学校は義務教育でもあるし、したがって専門化は見られないが、高校になると、はや普通と職業に分れる。それが大学になると、さらに細かく学部と学科に細分化される。われわれが学ぶべき世界は、本来渾然たる一つであるにかかわらず、これにアプローチする道は、ますます細分化されることになる。そして、専門的に精緻になればなるほど分化が進むことになる。

一方、われわれの頭脳であるが、これも百四十億ばかりの脳細胞から成り立っており、そのうち何でも九割とか、九割五分はまだ十分働いていないといわれるが、そこには本来専門化の垣根は見られない。ところが、専門的な分化が進んでくるとわれわれは、頭脳に人為的な専門的着色を施すことになり、定まった分野にだけ頭脳細胞の活動を促すことになる。それはある意味において不可避なことであり、また望ましいことでもあるといえよう。何となれば、そのためにその専門分野の解明がますます深く進むからである。

しかし、その場合、その他の分野に対する関心や興味が著しく損われ、または薄れることになると、われわれは専門化された片輪な人間になってしまい、場合によっては、自らの専門分野の

究明と理解にも支障をきたすことになりかねない。俗に言う「学者馬鹿」とか、「役者馬鹿」とかいうのも、その辺の消息を伝えたものであろう。専門の異なる学者同士が、言葉の通じない異邦人のようになってしまうことは悲しむべきことであり、それ故にこそ、分化が進めば進むほど、統合または総合という機能が大切になってくるのである。

われわれは常に、何事に対しても新鮮な興味を持ち、関心を持ちたいものである。そして幼児のように、ナイーブな驚きを持ち続けたいものである。また青年のように感激を持ち、感動を覚えたいものである。そこにこそ生きていく証しと、みずみずしい人生の生きがいがあると思うからである。

私の周辺の友人にも小学校だけしか出ていないが、立派な教養を身につけ、自らの職業に素晴らしい成功を収めている人が少なからずおられる。その人達は、自らの興味や関心が専門化の弊に災いされることなく、何事にも公平に指向され、広く活眼を開く捉われない関心をもって、自らの見識を養い技能を磨いてこられた方々にちがいない。いわば高学歴のもたらす一つの災いから免がれることができた、倅せな方々であるとも言えよう。

7. 随 想
高学歴化が極度に進み、入試問題が大きい社会問題にまでなってきた今日、われわれは、もう一度、人生の価値を見つめるとともに、高学歴に伴う弊害についても周到な警戒を怠ってはならないように思う。